

紀元一千九百零六年九月十六日  
光緒三十二年八月十一日

五福堂告白  
本堂自開辦以來，承蒙各界愛護，業務蒸蒸日上。茲因擴充業務，特將地址遷至新址，以便更好地服務大眾。凡我舊雨新知，請於本月十五日以前，移玉至新址辦理一切手續。特此公告。

宣統元年九月十六日  
五福堂主人啟

生

今回の在露の動向を要するに、又歐  
韓東洋と自を任ずるも解しからず、又歐  
米列強が同情を我國に寄せましますのは、遼特  
旅道の平和、鐵道獨立の扶植など事を國權  
として觀へざるにはなる事と思ひます。此  
の我國が關是とせし大主權は我が云ふまで  
もなく、昨年の宣戰の援助に堪へて却ち其  
承されて居ります。然り今度の征韓の戰爭  
に限りません。過ぐり今度の戰役の果ても  
同じく此兩國を以て出し、滿洲の戦役である  
まいと、故に鐵道民は上下々變ひば、其不  
穩固によりて韓國に對せば如何なる事かと  
思ひます。然らば此兩國を考慮する論議を導

向して押れ失ふべき指導の目的を通じ、  
安んじて及成を以て之れと欲やしむるべか  
たれば、益々其惡果を養ひたいとし、  
我對總督の王位繼承の維持を生ずると  
ならんかに考へます。要するに其根本主  
義の國權保持と、朝鮮を以て我國の領土  
にして恩恵を受ける方針をなすべしとなぬ  
まい。猶ほは、之れが最も善い事であり  
ます。實地行ふに當りて滿洲に侵襲さ  
るべきであります。併しなほ根本思想だけ  
は其處に置いて進まなければならぬ。中  
には韓露に對面攻撃すべき點を圖るれば  
近き韓露に對面攻撃すべき點を圖るれば

思ひます。  
又如何に我國の利益に思を盡らし、  
外國の流轉する人を見ますか。多分は俄  
國國民と感服して利益を得ようなどの  
目的で持てる様に見受られます。尤  
この邊りとせんとて彼處へ渡るなどは、  
天家の教訓を信ずるは、文明國系  
の大體であります。併し我が所請弱小  
の國に於ける方針は、苟正義と權利とを  
如何に維持するか、そのことになり得る  
ものなり。

所に於いては、東洋の如きものは二三の有力なる  
の會社の外は單独經營の體裁極く乏しく、  
故に各機關内外各該會社が何れも互に事業  
と建設の可成るを爲かたらず、相聞親以來建造  
したる製造廠の成績に徴して事實の証明す  
る所なりといふ。

●營口の現況

奉天鐵道の志願に於て人心を安堵したるとも  
以て、其設備尙不足と資本充實不足とするの例  
向より市場取引に用ゐる鐵の製造廠の如くも  
も近來此等信用を損失して、遂に上海爲供す  
となり、鐵の需要亦益して、遂に上海爲供す  
となり、鐵の需要亦益して、遂に上海爲供す

自らを無難にする事、可笑しき事なり。  
 ○日暮は余に於て尤も愉快を感ぜし、山暮の  
 景は遺憾の他、真賞迷了しを山湖暮石の静  
 々と黒色と帯びたる沈鬱の如何に寂寂の感  
 なるを余は寂寂と感ぜり。余は人の以て不仲  
 と評するの光緒人、余に於て感するものを此  
 止る事なく、余は頗る感の性格を有する者  
 ○治癒不能し、可及の治癒なれど、治癒  
 自體主義の應用にあらずや。補足経絡にして  
 無病無痛を得るべし。彼の特殊療法のみす所  
 遂に人に受け得るを誤らば、社會を害す。  
 といふも笑ひながらにありすや。  
 ○患者が知識者と個性と、同じく其の眞面目  
 大膽と虚偽とを直すべし。知るべき虚偽の所爲

層より下す箱の中  
 阿の秘術がはびひらん  
 烈風と轟きあひ  
 二名もの響きあひならず  
 どくろいゝ馬足の音  
 コギョと兵の武者時ひ  
 鐵馬より轟きて  
 鐵條の杖に当たる時  
 月入り果てし闇となり  
 天よりくさの星が降つ  
 我がハルビン兵隊の  
 後に近き鐵條に  
 日露の戦術がでて

またそのまゝ明白におきかへ下しおられた  
いふので、主人と野分や政操の命に代り  
作兵衛は腹を穿つ覚悟でございませう。重  
細承をいひましたけれど、それがむす  
父兄に取替はる暇はつて、國策を武藏修業の  
出立へいたしました。夫よりかよういふ  
しうか。今日までの伊能を包みす作  
兵衛に物難ると作兵衛は手打ながら作  
兵衛の物難りを承たさげまして、重  
細なるのみを父兄なるのみを知りまし  
ただ、只今知れ申すものがございませうし、お  
知るゝかも知れませんが、暫時お待ち下され

[illegible]

價格となるべし。船の運河の入口は、且下  
七、十餘隻の船が泊せり。河面の流氷も昨  
断、解氷。たれは、昨二日内には蘇杭糖の  
港を駁可せり。又、一、運船蘇杭糖、運復の  
足、昨今は諸船僅意、上下の傾向を呈し  
豆食糖、半、蘇杭糖、上下二、兩にあたり、  
本邦八、糖、船、増加、也。起下、俄等の、居住  
べき、運船の、幾、船、和、久、來、者、其、何、等、の、順  
をも、得、る、點、は、方、し、て、終、じ、日、を、送、る、もの  
し、現、在、運、河、日、本、從、船、來、港、の、船、數、の、概、在、る  
渡、航、者、の、内、に、て、も、四、百、右、に、お、り、と、云、ふ

靜養なるを定むるす、(十四)  
 處(一五)。弱(一六)者には飽養陰調すべし、剛(一七)者には飽  
 練(一八)すべし、然らずんば自己は遂に勝利  
 點に樂するの時に到らん、吾等も剛  
 小に可致する病に沈淪せしめて而して自己  
 満足と幸福とを得ん也。

○道徳とは弱者の自己が苦痛を去けんが  
 多めに勝手に暴成した方便の術也、見よ  
 在彼等の戲劇に連れて此の方便術は除け  
 し破壊されし儘にして新たに用ゐるに至ら

怒りには絶わぬ武士の操  
 怨と結ぶ敵来り  
 倭の光の夏あけの時  
 鳴動すとさけふの傳へ

講談

討仇武勇の譽  
 (廿一回) 本 社 井 竹 林 講 演  
 社 員 速 記

夫れと之から一本槍をさして追かけたまふ  
 人の道たる處に其時に別たて七人のもの

屋まじし男を一人つれてさしこみに入れた。たゞは此方にて其人を一日見せしめ、  
レハ無權のちを嫌ひなかつかしやと罵つて  
袖にへたりたる彼の人をも過かすやうつき  
の装へりたる衣を見ゆると物をつゝ手  
に懸して水づゝ息巻をつき喜顔に及びま  
た之の間には下野の園藝師を任入君が通  
手したるやまず重太郎は何れものゝあ  
たいと氣絶と其有様を見て歸るのみがたわ  
ふ。頭兵衛が「若君其之の如きは高き身  
及びもて世に下野の園藝師に兒を養ふ事

は、又他國人の愛國心を尊重するの爲に、  
りませぬ。韓國人の素朴而剛直なる氣には、  
我帝國の主義を誤解し、愚に傾ゆるは私を  
以て吾國の恥と爲すであらう。然し同時に  
是等の内には二種の差別がある。一は、  
兒無頼遊侠は民事を好む徒である。二は、  
彼は愛國の愛熱止まらずして事を起すに足  
りしものである。之れ等は共に我帝國の  
の政策を誤解せしより出でしもの故然しな  
がら、彼等に至りては、大に其忠義の情ひ  
べきものがありませぬ。斯る徒輩に對つて、  
前者に對すると同じく威嚇を講ずるは、洵  
と云ふに、已往の歴史は、吾國に於て、  
に、彼國右代の歴史は實に替へたる文明を  
有して居ました。今日我が國の先覺者とし  
て自ら、任じ、勉め、も許さるゝ我帝國  
は、彼れの文化に負ふことの多き者なれば  
強うに勉め、自ら、任じ、勉め、も許さるゝ  
とせぬ。故に彼國の政體を導するものは國民  
教育の普及を計るゝが、最大急務かと云  
へば、今固の困難難題に就て、其急務とし  
て、最要すれば、今後は我も角も、今日までの  
處にては時勢は彼れ等より速く、突飛突

るに、先づ第一に我國民が韓國人に對  
愛の情を以て臨まなければならぬ。我  
給ひ我新滿洲に於ける米國が我國に對  
の如き態度を以てせなければならぬ事  
に、故に私は今後我國民が韓國人に對  
は親しく、文明の氣運を彼地に弘布す  
とは甚だ喜ばしき事なるべし。故に、彼國  
顧せなければならぬと思ひますか、之  
時に一方には漢學者の成るべく高野鶴自  
人物をあらんと希圖致しす。

報 報

里に於ては、ベツと成つたのを、反して「我輩公使は英米二國の外務大臣」(譯註)といひ、現勢でなく、いつか▲露國大蔵大臣コッソフは此處條約を差出したと云ふ説明がある。敵艦は非常に窮乏するに拘はらず、主砲の連射弾は幾多さきから放つて之が其數の一掃つて用ゐるは出ずまいに對し、我が船も略過するに及ばずに、我々の敵を捕獲せし居るものとである。倭通しても好いのが餘り其後通過して矢張りそのヤブの覆幕す

の人は余を喜して「君は専制主義の真骨  
斬して、余は如何なる弱點の怪物と  
するが如く誤解すべし」と其の誤解は驚  
の誤解にして余は實に益處に富み、尤も  
和洋真主義の可成る男なり阿々、

文苑

藤田 劍南  
數日矣  
泊向君家告石説。吾姑四兩稱疑。遂

の  
毎  
上  
平  
が  
あ  
く  
ひ  
つ  
て  
い  
よ  
奴  
す  
か  
の  
家  
し  
ま  
す  
か  
ら  
さ  
び  
し  
く  
意  
を  
加  
へ  
て  
放  
ち  
や  
す  
し  
た  
上  
喜  
六  
い  
よ  
奴  
は  
高  
野  
強  
兵  
衛  
が  
つ  
を  
殺  
した  
と  
き  
手  
傳  
つ  
た  
罪  
も  
こ  
う  
い  
ふ  
か  
相  
當  
な  
刑  
に  
行  
な  
は  
れ  
る  
所  
本  
家  
兄  
妹  
は  
勿  
論

申す所の眞實なるは太平といひても大に欺  
ふ類は不審ならんやいましてございます先  
時に作樂齋村長之なる太平が御身の前  
をたつて重地へ來たり易勝殿は從前  
本へ泊りて金糸巻と共に服着をしましめ  
人力車計したる儀で御身の身の上  
如何様か手帳に依て御石の跡へ歸  
じ候所の持間と正る川津の役所へ御  
身を引取り申した次第でございます之れな  
ら太平といふ人は御身の兄君重勝だのつき  
あ御身に願ふる恩人のやうな心得ますゆゑ

雜報

餘り其後に過ぎる矢際には、その種を

香、路、四、海、林

相當な刑に行なはれる重太郎兄

刑に行なは

重太郎兄は勿論か  
御身も願ふる恩人のや

か  
御身みみも

る恩人のやうに心得ますゆゑ



雜  
報

我國の對韓策と題し紐育サンは記するに左の所説を以てす又た大に韓國の輿論を窮ふに足るべきあれば茲に抄録するものとすぬ

第四區同  
區區  
入  
三百〇七圓八十錢  
發出  
三百〇七十圓八十錢  
十五圓  
計三百八十五圓三十錢  
差引不足金七十七圓五十錢  
因みに第一區は月數二百六十に於て二百  
均負額十七圓五厘強、第三區は月數六  
十七にして一數平均十二錢九厘強、第三  
區數は毎三に於て一百平均則十二圓五

●津町申請　岩津の衛生組合にては、夜  
の騒音に於て決議したる騒音基準等

度より兒童を人學せしめんとする者は四日  
四日までと同様へ屈出すべしとなり

●小學校の授業開始 富公立小學校に  
は來月四日より授業を開始する由

●加藤顯問の來釜　韓國宮内顧問加藤  
維氏は祝捷大使同伴にて一昨日來釜。

工赴任されたり  
山口輕農事試驗所技手  
一昨且奈釜松井旅館へ投宿  
中 原 房 一 氏

●**確實商店案内** (二)

地方に依り弘く調製の依頼に應じつゝあ  
同店は當峯山藥店中の銘々たるものあり  
●鶴池商店 本町北濱通にある煙草專賣  
商店にして各種の刻卷煙草の卸小賣は勿

殊に養老印刷煙草は同店の一手特約販賣  
たり

●水野商店 此亦本町此邊にあり醤油  
小瓶産の者類弘並と左翼製の御書津重

類を主として其他雜貨の卸小賣を爲せり  
●鴻島商店 辨天町長手通に在る吳服太  
類を專業とし傍ら東京番二星製 服物及

●角野商店 入江町にある金物店にして  
鋼土木建築用金物亜鉛引平浪板鋼鐵線並



非小說

したるにより此の罪狀を以て、人等は一々い  
ひたる事と爲し知れる。又等は「アッ」  
と言ひて逃げ出したるより初めは油斷し得  
たる日本人も逃げ出したると同時に長上則  
チヤイン十二圓を差落したりといふ右の爲  
同工事は年々月程進捗すべしといふ

●露探柳君七の處刑

元山兵隊の手によつて昨年十月應酬せら  
れたる露探柳君七は兩米岡地の監理署に留  
置ありたるが處を去る廿五日と以て我軍  
政執行官より左の宣告を受けたるといふ

宣　告

韓國開原北道楸嶺郡奉陽署

開陳被告　柳君七廿六歲

右陳被告事件以下付き審理と定ぐる處故

舊は明治三十七年十月十五日成議通傳後

郡元山津に屯在しある日本兵營の後方重

砲に對する在るの鐵砲多兵第四十七聯隊砲

君は蘭州へ歸しらば浪ぞ、幸しや此國に坐  
よしよふか。

なればおこへが四國としても、間にどす。  
んで動きやせぬ。

二世も三世も笑ひし中よ、竹、婦に切れた  
ためしなし。

持てと盡せき便りか、返ひ、敵を、貢手か、注  
るやら。

◎味付飯 味付飯は種々あるが簡便な  
ものならば海苔飯、鰻飯、油揚げ飯など  
よがらん海苔飯は薄い海苔を焼く、細く  
縋んで茶碗へ盛つて炊たての飯へ混じ生  
油をかけてまぶす。鰻飯は鰻節の心を削つて  
海苔飯と同じ仕方とする。油揚げ飯は水洗しを  
海苔を細く切、煮出汁、味淋、生煎油で  
少し辛みに煮て飯を移す時飯の中へ少し使  
せる。油揚げは水洗せし中と食得に不快を覺

しらみを取出して角力を取らして居たさて  
○香紫などでござんす小娘。○僕が一昨  
夜幸座の娘と太夫を應へに行つた處が新聞  
社の機嫌に大に面白尻を据へ込んで手摺を  
兩腕を持たせかけ額枕をついてぞ微睡む  
な面をふらさけて見た女郎が腹が飯奴は  
女郎だ。因寄生。○夜中稲屋町の飲食亭  
卒亭の動を通つて見給へ曲體然たる白首女が  
五六匹ニユツト首を突出して獵物を待受は  
て居る但しウツカチして捕獲とならず  
れハバロト金。○奇品別館開張式の餘  
りとして催すべき素人芝居の一席加入せ  
とする人は南渡通りの十字星方へ申込論  
よ浅田同。○○○○○鮎者たりし  
君は今回。○○○○○者なりし  
○を○かして居らちや々(淺草難迷)▲

ある君と、心合くおはせし時の如、  
 一きほどは貴郎が故國にれば、近し時の如、  
 娘も健在に中々行儀よく、下女の北竹もい  
 とまろく、  
 貴郎が故國にあれば、家政も自然善い  
 とまろく、  
 妻よへ何事なう日々暮し居り  
 て、心合く、  
 貴郎が故國にあれば、折清、満洲の恩  
 候よ、  
 國に一人の不慮ある家に可受て、人  
 の幼兒ありと覺せば、此上其御身大切に  
 貴郎が御申されし、大層悟入とやらも出来  
 こと、充分なる御功名も遅けらるゝこと、  
 切々願はしうとされ、  
 「天地に此世國ありてこそ永久に此世  
 は光榮ありとぞはせ」  
 偶々第三回記念繪へケキを買求めたりしを  
 其真裏の中に面差しといひ、似ひしものあり  
 しを、或は眞にやあらんと、兎や角想ひ煩ひ  
 たら、遂にこれ相識しからんとて上の書を取  
 り、探みて今日迄あるまじしなり。

●義妓連に木村贈與 香港館内蔵松吉吉  
の分三十五名より日本赤十字社に香港支支費  
散會會として百圓三十圓を寄付したると云  
已に本報に記載せし「ある廿四日付を以て」  
社松方正義伯より木村友左の贈狀を送た  
なり

右被否の處爲は神軍總兵官兼諸番事八氏  
の調査及被害の明白に依りて証誼充分な  
るを軍令に照し苦罰百に處す  
三月二十五日

軍政執行官 赤松 憲定

ぬる。○昨午の惣菜、葱に揚げ葱、豚味  
 和布ぬ。○和布、同湯、(同刺身)入  
 芋、地大根、胡蘆、湯揚豆腐、のめ、煮、松菜に、  
 豆腐の漬汁、切干大根に揚豆腐の漬汁、  
 芥子菜の唐子、和などするが、でた、  
 大匙形に切り、味噌、醤油、粉湯、で煮て、  
 溶の羹を流し込み、煮汁を、蒸、抱、せて、  
 活の煮付、な、盛合せたのは、一寸置い

讀者の  
 水仙と、汝は如何なる  
 運なちものなる、潔白な  
 肌を持ち、雪、闇、霜と争  
 世人が汝を嘆息せざる  
 如何なる、麗ならん、嗚呼、  
 中も汝と梅と其の如く、不公平のものなる  
 汝は須らく忍耐なれ、やがては、枯木に花  
 く時も来るべければ、(小水仙)龍嶺山  
 縁、満るやうな松の間、櫻を權付けたな



分

子と共に沈没した而して今猶ほ浮る上が  
 一昨夜一露チヌ土原の某樓、突如して△  
 小菊、愛に想つゝ泣く短氣者、△僕  
 事が出来ぬが誰か早く引揚て呉る者はな  
 △菊、△女は自然の好い男と夫婦にな  
 て思はれは例令幾十里離れた外國に居て  
 故郷のおとを氣にする者ではないが男は  
 點にさると思ふ氣の弱いものであると感  
 は語れり(雲山鹿里生)

社 告  
 秋葉辨三  
 赤澤 譽三  
 本月分新聞代廣告料集金の爲り右之者  
 逕回致す候間御座全く御達被下度  
 候也  
 三月廿九日  
 朝鮮日報社

●火賊栗里洞で暴す  
近奉火賊の出沒多し被害者頗多しとして訴へ  
來るが又々火賊の多しといふ事は三月十八日  
日午後十一時、仁同郡栗里洞(若木停車處)  
を去る事半里許、張岡城宅に火賊大凡十三  
名、火銃二挺、鐵刀二挺を携へ、暴し、家財、  
を脅して、數十六、百文、及雜品三點を強奪  
して引上げ、歸途家人の追跡を防ぐために空  
砲發を放ちて去れり、と亦同代楊坪洞に於  
て盜火せるものも、損失家人三戸、人畜には  
死傷ナかりしと、是亦同一の火賊なりしナ  
ス、と、八人の報告也。

▼乃公も同黨と糾弾だ、と火賊云々▲

●流行の洋傘 昔年は矢張り時尚の爲  
製造元も各商店も製造仕入を多少の差違ひ  
氣味なるが小賣物にて目下流行好きは男  
にては相違らず洋傘代用の細傘 絹張の  
色は縹又は灰色にして普通代價は四圓七  
十錢より七圓位其以上は好みに依りて隨  
高價の物あり女物は紋無地にして地色  
幾分大形にて中縫あり代價は男物同様  
て五圓前後より七圓位を普通とせられ

敬慕心を燃ふるに足らん櫻花園氏。▲鳴  
 釜山在留の同胞、郷等何んぞ夫れ良心  
 致を欠くよとの甚だしきや聞説を遂げし  
 きは會黨と敵事との間に紛擾を醸すの  
 がた死滅亡にづきたりと嗚呼嘆きの  
 りならや(天一生)▲潔癖性の日本人も  
 らう韓國に来て居ると自然轉化されて不  
 に流るゝは屈むべきことや(韓カヲ生)  
 此れ今葛城して家に手鏡の時へなし而か  
 借金五五百圓ありあれ我れの嘗て信用を性  
 得たり証書な世の借金の若じふまゝ  
 等は借金多ければ借金さびひ信用  
 りし金を自ら免れて自から慰めそへ  
 ▲山海東興聯合青年會の合

米國直輸入

金貨印

多分山本町

森野店

金貨印

洋釘

多分山本町

森野店

金貨印

洋釘

天氣豫報

北又は東乃風曇

但少雨

京仁線時刻改正

[illegible]

煙草製造販

大日本政府專賣局ノ特許ヲ受  
シ多年練磨ノ技術ヲ以テ高  
ノ製造業相當ニ懇切ニ研究  
御購買ノ願上從

紙卷 草

地の煙 貳十本入

文 貳十本入

風 貳十本入

刻 煙草

高尙優美特製

地の煙紙入包

他紙卷煙草各種玉造御汗

韓國製造元

賣廣告  
ケ高級ナル日本葉煙草ヲ輸  
尙優美ナル刻煙草紙卷煙草  
ト誠賣仕候ニ付多小ニ不  
部  
の煙文明各種  
紙入各種  
文に應ジ特製可申上候  
日韓煙草商會

▲注意 急行列車 八牛角調、富平、梧樹  
調、鷺津、二倅車七之  
明治三十八年參月

京釜鐵道株式會社

洋傘販賣品 二修繕

漆器類シナカパン  
其他新古日用家具  
右卸小賣廉價販賣  
御不用品何でも買  
諸品競賣委託應

廣 告

果實諸苗木 諸花諸盆

裁之苗販賣仕候間多少に不拘御買求被下  
度候此段廣告仕候也

登し琴平町叁拾貳番地

植木商 神高綾吉

臺灣直輸入夏はうし  
一手販賣  
價格低廉  
經濟親玉

淺野商店  
西町五丁目

古物商業 幸町三丁目  
雜貨商 油谷商會  
電話二五七番

●有價證券買賣  
●電話讓渡委託應  
●電話至急受託

株式會社  
第五十八銀行  
支店  
釜山

韓國經營上 資來ノ發展ニ目ヲ注グベキハハ  
山浦也昌原ノ農作皮成宜寧ノ開墾鎮海海  
舉ケテ數ヘカヲシ山高ク水深ク天然ノ良  
港也馬山ホテル開業廣告  
大正十一年三月廿二日開業  
釜山港北濱町壹丁目  
橫張商店

右確實を旨とし取扱可申候間御用向仰付  
下度候  
知願上候  
公なる  
周旋業  
津申光  
幸可三丁目  
電話二五七番

東京日々新聞◎報知新聞◎大阪新報◎

京釜鐵道ノ三浪津ヨリ馬油浦ノ間通ネ近  
**劔柔術教授**  
 師範 山田信廣氏  
 釜山 大瀧町 彰武館

當社ハ今回韓國總領事館發見之件ハ廣ク印  
 刷門ノ榮枯ト主觀シテ各公衆ニ便益ヲ  
 其印刷ノ何ヲハ問ハズ確實ノ速調ト欲  
 ク大ニ顧客ニ對シテ満足スル爲メヘント  
 希クバ四方ノ諸君當社書籍ノ完備ト報  
 トモモ價廉ノ御注文アラハ申事ヲ茲ニ謹  
 告仕置候也  
 釜山入江町十番地  
 日韓印刷昌文社

大正朝日新聞○大阪毎日新聞○朝鮮  
廣告印刷大勉強取次  
大邱方面一手特約販賣所  
總發商  
**朝日商會**

朝鮮唯一の  
大新聞  
廣告印刷大勉強取次  
大邱方面一手特約販賣所  
總發商  
**朝日商會**

小間物  
 雜貨  
 靴  
 價目  
 井筒屋  
 九三町濱

朝鮮日報一手販賣  
及<sup>東京</sup>廣告取次所  
商聲社營業部

特別大  
安賣

御旅館並御料理  
附屬牛乳搾取販賣所豐後鎮  
日本屋建築十八棟園四半北絶  
大邸東門外  
停車場前  
城

韓語高等通譯  
但シ學校教員若クハ銀行諸會社ニ  
ハレタシ  
右需要ノ方ハ一週間内ニ來談アリタシ  
(姓名ハト社ニ在リ)

此の外諸雜貨  
本町三丁目  
石川勝藏商店

-233



